

Title	幸田露伴が描く陶器と記憶 : 「太郎坊」における盃をめぐって
Author(s)	吉田, 大輔
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2016, 50, p. 99-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70036
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

のである。

# 幸田露伴が描く陶器と記憶

――「太郎坊」における盃をめぐって――

キーワード:幸田露伴/「太郎坊」/陶器/室生犀星/「陶古の女人」

吉田

大輔

はじめに

説』(露伴自身も編集に濃密に関係した、いわゆる第二次新小説)夏季増刊号巻頭に掲載された(第五年第九巻)。四 百字詰め原稿用紙にして二十枚程度の小品であり、露伴の作品としてははやい時期に言文一致体の文章で書かれたも 幸田露伴(一八六七―一九四七)の「太郎坊」は、一八九九(明治三十二)年七月十五日づけ発行、春陽堂『新小

る言及があり、新しいものとしては吉成大輔の論考がある。また、芹沢俊介もこの作品について書いている。 これらの論考(特に吉成のもの)は、「太郎坊」執筆時の状況をよく浮かびあがらせてはいるものの、この作品の 「太郎坊」は、現在までの露伴研究において多く論じられてきた作品ではないが、古くは露伴の弟子・塩谷賛によ

器を主題としながら対照が際立つ作品として室生犀星(一八八九―一九六二)の「陶古の女人」(一九五九) 本文を詳しく分析した論考ではない。そこで本論では、作品論として「太郎坊」の詳細な本文分析を行いたい。この(③) 作業を通して、かつての恋愛の記憶が陶器という形をとって残存・現前し、そして潰える瞬間を描いた小説として 「太郎坊」を規定することを目指す。その上で、直接の影響関係が確認できる作品ではないが、「太郎坊」と同様に陶 を補助

表記を改めたところも多い。また、塩谷賛が述べているように「太郎坊」はルビが独特の効果を上げている作品なの で(詳しくは後述する)、第二次露伴全集版に拠ったルビも含めて引用する。 本論において引用する文章は、正字・正仮名は概ね引用元の表記のままとしたが、踊り字に関しては論者の判断で

線として用い、陶器描写の比較を行うことで「太郎坊」という作品の位置を明瞭にしたい。

## 、安楽な生活の型、「適宜の労働」

太郎坊」は、次のように書き出される。

らひらと彼方此方へ飛んで居る。 見るさへまばゆかつた雲の峰は風に吹き崩されて夕方の空が青みわたると、眞夏とはいひながらお日様 の傾く

の薄禿の男ではあるが、其餘念のない顔付はおだやかな波を額に湛えて、今は充分世故に長けた身の最早何事に 主人は甲斐甲斐しくはだし尻端折で庭に下り立つて、蝉も雀も濡れよとばかりに打水をして居る。丈夫づくりゅるに、からがい

も軽々しくは動かされぬといふやうなありさまを見せて居る

郎坊」の書き出しに妙味があるとすれば、このどこか自由間接話法的な振幅に由来する。 よくなる」と感じている主体はこの時点ではいまだ明確に読者の前に現れてはいない「主人」であるとも読め、「太 者」として必要な感覚以外のもの」がここに見られると書いているが、そう断定することはできないだろう。「凌ぎ ているようにも、次に登場する「主人」の感じたものを間接話法によってさりげなく先取り、ここにまぎれこませて る「見るさへまばゆかつた」や、一文目の終わりにある「凌ぎよくなる」という言葉は、 ら薄く光つて見え」「其下を蝙蝠が得たり顔にひらひらと彼方此方へ飛んで居る」ような夏の夜が訪れる。 が呼応していく。「軈て」太陽と月は徐々に交代していき、ようやく膨らみかけた「五日頃の月」が、 る」。だがそれはもう、真昼の空の鮮烈な青とは異なるものであり、「お日様の傾く」速度と体感的な「凌ぎよさ」と みわたると」「連れて」「軈て」といった経過を示す言葉によって一筆書きのように簡潔に描写される。 いるようにも読める。吉成大輔は、「凌ぎよくなる」という叙述を「語り手の主体的価値判断」であるとし、 しを反射して「見るさへまばゆかつた雲の峰」、すなわち午後の入道雲は「吹き崩され」、「夕方の空」は ふたつの文章によって構成された一段落めでは、夏の夕方から宵へかけての時間と気象の数時間の移ろいが「青 語り手の主観的観察を述べ 「葉櫻の繁みか 夏の強 「青みわた 冒頭にあ ,日差

吸・間合いは巧みである。「主人は」先ほどの「葉櫻」の植えてある庭だろうか、「はだし尻端折」という姿で「庭 よって展開された叙述は、二段落においてはカメラワークが切り替わるように平行的なものにすぐさま移行する。 飛んで居る」という蝙蝠を描写した一段落終りの文章から二段落めのはじめ、「主人は」に特に説明なしに移る呼 段落で「雲の峰」「お日様」「五日頃の月」「葉櫻」「蝙蝠」などをめぐって、 下から上を見上げるような視線に

端折」をして庭に打ち水をするような男である。「今は充分世故に長けた身の」の「今は」という言葉は、「主人」が れているとはいえ、この男は奥の間にゆったりと座っているような「主人」ではない。夏の夕刻には自ら「はだし尻 章で「今は充分世故に長けた身の最早何事にも軽々しくは動かされぬといふやうなありさまを見せて居る」と描写さ に下り立」ち、「蝉も雀も濡れよとばかりに」さかんに「打水をして居る」と述べられ、まずその行動が描写される。 しい。頭は薄くなり額に皺が寄る程度には老いていてもけっして衰えてはいない、という中年男なのだろう。続く文 「主人」とは「丈夫づくりの薄禿の男」であり、「餘念のない顔付はおだやかな波を額に湛え」たような人物であるら

この二つの段落ではすべてが現在形によって語られており、段落を跨いでの三文には、「居る」という同一の文末

「世故に長け」なかった若いころの時間を暗示している。

が繰り返される。

作品世界を成立させる助けをしているとも述べている。(6) という特集タイトルが先行し、依頼を受けて露伴が執筆した作品ではないかと推測している。(5) の他の号の編集状況なども確認したうえで、「太郎坊」という作品の成立に関して、断言は避けながらも、 ル イトルと書き出しの一文にある「雲の峰」という言葉の呼応は、両者に関連があると考えるのが自然だろう。 |雲の峰||をはじめとして、夏の季語が作中に数多く登場していることも吉成は重視し、それらが「清涼感に満ちた\_ ·蝉」と夏を示す季語は散文世界に散りばめられており、その通りだろう。 吉成大輔は、こうした書き出しの部分をめぐって、この小説の発表媒体である『新小説』夏季増刊号の特集タイト 「雲の峰」であり、 なおかつ「太郎坊」がその号の巻頭に置かれていたことを重視している。 冒頭の部分だけを取り出しても、「雲の峰」「葉櫻」「蝙蝠 確かに、雑誌の特集タ 吉成は

「太郎坊」は次のように続く。

生もある人であるによつて、人の妻たるだけの任務は厳格に果すやうに馴らされて居るのらしい。 て居るといふのだから細君が奥様然と濟しては居られぬ筈で、かういふ家の主人といふものは、 細君は焜爐を煽いだり、庖丁の音をさせたり、忙がしげに臺所をゴトツカせて居る。主人が跣足になつて働いまえる。上きりん、尊称、皆ちゃりう 俗にい

まづ賤しからず貴からず暮らす家の夏の夕暮れの状態としては、 下女は下女で碓のやうな尻を振立てて椽側を雑巾がけして居る。 生き生きとして活気のあるよい家庭である

事仕事をしている。語り手はその様子を「賤しからず貴からず暮らす家の夏の夕暮れの状態としては、生き生きとし きな言葉なのか、「太郎坊」より約半年ほど前に発表された「椀久物語」でも人物描写に用いている。「主人」は庭で 打ち水、「細君」は台所で夕飯の支度、そして「下女」は「碓のやうな尻を振立てて」縁側の掃除、と三者三様の家 丁の音をさせたり、忙しげに臺所をゴトツカせ」、夕餉の支度をしている。「罰も利生もある」は仏語だが、露伴は好 とりは「主人」の「細君」であり、もうひとりは家に置いている「下女」である。「細君」は、「焜爐を煽いだり、庖 て活気のあるよい家庭」とまとめる。この家にはどうやら子供や老人はいないようだ。 居る」という現在形はここでも繰り返される。次いで描かれるのは、「主人」の家を構成する他の二人である。 ひ

つている」ことは、「太郎坊」という作品においては、少しも退屈や倦怠のニュアンスを伴って語られない。 の家庭で繰り返される生活の型が短い描写によって確実に提示されていく。それが「毎日毎日版に摺つたやうに定ま て来ればチャンと膳立てが出來ている」のが「毎日毎日版に摺つたやうに定まつている寸法と見える」と語られ、こ この引用箇所に続く段落では、「主人」は、打ち水をした庭を「満足げ」に見渡すと、銭湯へ行ってしまう。 ・ 茹蛸のやうになつて」風呂から戻ってきた「主人」は、花蓙の敷かれた縁側(先ほど下女が雑巾がけし、 清潔に 返っ

した縁側だろう)で煙草を吹かす。するとすぐ、「黒塗の膳」が主人の前に運ばれて来る。段々とあたりは暗くなり、 読者はあたりをつけることができる。その時の庭の様子、縁側にいる「主人」の様子は、次のように語られる。 籠洋燈」や「岐阜提灯」に火が灯される。「籠洋燈」が出てくることで、時代設定は少くとも明治維新以降だろうと

がら、 **潘色に夕月の** おのれの勞働が爲り出した快い結果を極めて滿足しながら味はつて居る。 光の薄く映ずるのは何とも云へぬすがすがしさを添へて居る。 主人は庭を渡る微風に袂を吹かせな

明示しない間接話法で書いているようにも読める幅がある。 果と相まって、「主人は」涼を感じる。 は誰なのか。この文章もまた、語り手の主観的観察が述べられているようにも、「主人」の内的な感覚をはっきりと の薄く映ずる」さまは、「何とも云へぬすがすがしさを添えて居る」と語られる。「すがすがしさ」を感じているの に寄って行く。それはまるで「夕立の後」と「見紛ふ」ばかりの濡れようであり、 した快い結果」であり、その快さにこの男は「極めて満足」している。そして座敷ではなく縁側で晩酌がはじまる。 から徐々に暗くなっていく移ろいが示され、文章は、「ひょろ松」「檜葉」という植物の上に「滴る水珠」という細 梧桐」「ひょろ松」「檜葉」が植えてあるらしく、そう狭い庭ではないのだろう。ここにまた風が吹き、 居る」という現在形はなお繰り返される。夏の「梧桐」はちょうど青い花をつけているかもしれない。 それは風呂へ行く前にしておいた打ち水という「おのれの労働」 冒頭の一文にあった「葉櫻」に加えて、この家の庭には 植物の 「濡色」の上に 打ち水の効 一夕月の光 その繁み 一爲り出

所へ細君は小形の出雲焼の燗徳利を持つて來た。主人に對つて坐つて、一つ酌をしながら微笑を浮べて、

「嘸お疲労でしたらう。」

と云つた其言葉は極めて簡単であつたが、打水の涼しげな庭の景色を見て感謝の意を含めたような口調であつと云つた其言葉は極めて簡単であつたが、打水の涼しげな庭の景色を見て感謝の意を含めたような口調であつ

何 主人はさもさも甘さうに一口啜つて猪口を下に置き、 疲労るといふまでのことも無いのさ。 却つて程好い運動になって身體の薬になるやうな氣持がする。

而し

て自分が水を興つたので庭の草木の勢ひが善くなつて生々として來る様子を見ると、また明日も水撒を仕て遣ら

うとおもふのさ。」

と云ひ了つてまた猪口を取り上げ、静に飲み乾して更に酌をさせた。

と快げに笑つた主人の面からは實に幸福が溢るるやうに見えた 「その日に自分が為るだけの務めを爲て了つてから、適宜の労働を仕て、 同じ酒でも味が異ふやうだ。これを思うと労働ぐらゐ人を幸福にするものは無いかも知れないナ。 湯に浴つて、 それから晩酌 ハハハハ。」

ねぎらう言葉をかけながら、「主人」に酌をする。「言葉は極めて簡単であ」るものの、さっぱりとした言葉とそれ 飲むようだ(あるいは明治にはそれが普通だったのかもしれない)。そうして「細君」は「嘸お疲労でしたろう」と さも甘さうに」「猪口」に口をつけ、酒を飲みはじめる。一口飲んで、打ち水という労働(ほねをり)は程よい運動 を言う「感謝の意を含めたような口調」は「主人」にとっては落ち着くものなのだろう。そうして「主人」は「さも 「小形の」「出雲焼の」と陶器のディティールを具体的に重ねて書いている。夏でも燗をつけてこの「主人」は酒を 縁側に「細君」が「小形の出雲焼の燗徳利」を持ってやってくる。単に「燗徳利」を持ってきたと書くのではなく

を仕て、 になり、 様子は「實に幸福が溢るるやうに見えた」と描写される。 らい人を幸福にするものは無いかも知れないナ」と言い、機嫌よく笑う。自分の生活の型に従って今日したこと(そ うして働くことを嫌だとはまったく思っていない。「務め」「労働」ともに酒をうまくするものであり、 うことに喜びを感じることができるような作業を言うのだろう。生活の資を稼ぐために「主人」がどんな仕事に就い の務め」はおそらく生活の資を稼ぐ労働を言い、「適宜の労働」は金銭は生まないが生活の必要を満たし、それを行 口から二口目の酒をまた飲む。次に主人は、重ねて「その日に自分が為るだけの務めを爲て了つてから、 接に働きかける労働(ほねをり)の喜びが「明日も」同じことをしたいと「主人」に思わせる。ここまで話して、猪 るというだけではなく、また庭を手入れするという意味だけでもないのだろう。「草木」という生きているものに直 れはおそらく昨日もしたことであり明日もすることだろう)を言葉に出して語ることで、さらに上機嫌になる。その ているのかは語られない。居職か出職かも語られない。生活の資を稼ぐための「務め」とは言っても、「主人」はそ 東京らしいことも示されていく。自分の「身體の薬」になるだけではなく、自分が水をやったことで「庭の草木」が 「生々として來る」から、「明日も水撒を仕て遣らうとおもふのさ」とも続けて言う。 単に自分の家の庭を涼しげにす 湯に浴つて、それから晩酌に一盃飲ると、同じ酒でも味が異ふようだ」と言う。「その日に自分が爲るだけ 却って「身體の薬」になるような気がする、と「細君」に言う。夫婦の会話の調子から、それとなく舞台が 特に「労働ぐ 適宜の労働

お疲労でしたろう」の つ前の引用箇所での「おのれの労働が爲り出した結果」の「労働」に「ほねをり」、いま引いた箇所での「さぞ 『新小説』に載った初出時に付されたものである。塩谷賛は次のように述べる。 「疲労」に「くたびれ」、「適宜の労働」に「いいほど」「ほねをり」というようなルビ使いは、

たあるまい うを本当、かげを影と書けばいいではないかと言う人があってもこう書くのが当時はやりであったとすればしか 実をほんたう、 何でもなく読める言葉がただ音で読むから一々むずかしげな漢語になった。労働をほねをり、 単行本は 『長語』に収められた。収めるにあたり他の作品とともに雑誌にあった振仮名をほとんど廃したので、 余影をかげと読ませたのが完全に復元された。最初からほねをりを骨折、そさうを粗相、 過失をそさう、真 ほんた

り」というルビが振られているので、校訂の問題だろう。 言葉と話し言葉の乖離」を示すものだと言うが、おそらくそうではない。会話文でも地の文でも初出では「ほねを らき」とルビが振られていないところ(地の文)と振られているところ(会話文)があることを挙げ、それは に収められる際には大部分が省略され、かえって読みにくくなり、岩波版第二次『露伴全集』ではそれを初出時に戻 は塩谷は尾崎紅葉のルビ使いなどにも触れている。芹沢俊介は、岩波文庫版『太郎坊 して掲載したということであり、このようなルビの使い方は「当時」の「はやり」なのだと言う。 つまり一八九九年の初出にあった「労働」を「ほねをり」と読ませるようなルビは、『長語』(一九○一、 他三篇』で「労働」に 引用箇所のあとで 「はた

う。 焼」は鴫を焼いたものではなく茄子田楽を指す)。主人の機嫌のよさが伝染し、細君も機嫌がよいようだ。台所へ 見えていたと語られ、「主人」はますます機嫌よく猪口を重ねていく。「酒も好い、下物もよい」「お酌もお前だし、 天下泰平といふ譯だな」と言い、すこし茶目っけを含ませながら「だがご馳走はこれつきりかナ」と「細君」に問 続く段落で、膳に出ているのは「有触た鯵の鹽焼」だが 彼女も機嫌よく「厭ですネエ、御戯謔なすつては。今鴫焼を拵へてあげます」と答える 「穂蓼」が添えられていたことに「一寸細君の心の味」が (念のため記せば 「鴫

に猪口を突き出す。「其手は何となく危げ」だった。そして出来事が起こる。 を食べるが宜い」、と言う。「はい、有り難う」と答えた細君は、風呂で温められ、酒も入りはじめた主人の顔を見て 行った妻がやがて鴫焼を持ってきてくれる。主人はそれに「豪氣豪氣」と言いながら箸をつけ、「お前も其處で御飯 いながら応じる。この時主人は酔いが回ってきて「大分とろりとして」いた。 金太郎のやう」、と「真に可笑さうに」主人に告げる。主人はハハハと、「湯が平生に無く熱かつたからかナ」と笑 けれど「酒吞根性」でもう一杯と細君

# 二、「感情の遺した餘影」を湛える陶器

時無言のまま顔を見合せた 模様の着いた永樂の猪口で、 上に打付つて、 は主人の手をスルリと脱けて櫞に落ちた。はつと思ふたが及ばない、見れば猪口は一つ跳つて下の靴脱 細君が静かに酌をしやうとしたとき、主人の手は稍顫へて徳利の口へカチンと當つたが、 大片は三ツ四ツ小片のは無數に砕けて仕舞つた。是れは日頃主人が非常に愛翫して居つた菫花の 太郎坊太郎坊と主人が呼んで居たところのものであつた。 アッとあきれて夫婦は霎 如何なる機會

盃 の盃の呼び名が「太郎坊」であると明かされると同時に、作品タイトルの由来するところもはじめて読み手に示され の間に、 は壊れてしまう。ここまでの流れで特に読み手が注意を払ってこなかった「猪口」に突然、焦点があてられる。そ ある夏の夕方、 盃は大小の破片になってしまった。 縁側で涼をとりながら気分良く飲んでいた「主人」の気分がここで一変する。「はつと思ふ」一瞬 男が 「非常に愛翫」していたらしい、「永樂」の「菫花」の絵のついた

で御諦めなすつた貴方が、

何んだつてそんなに未練らしいことを仰しやるのです。まあ一盃召し上れな、すつか

る。作品タイトル「太郎坊」は、主人がこの盃を呼ぶ名前であった。

ける。次のように続く。 と細君は らうか」と、金継ぎにでも出そうと思ってか、 れど主人はまだ「太郎坊」にこだわっており、「アア、何様詰まらないことを仕たな。何様だらう、もう繼げないだ 碎」を「熟と」見たままだ。細君は笑いながら、どうしてそんなにその猪口にこだわるのかわからないというように 破片を合わせて見ている主人の姿が述べられる。「己が醺つて居たものだから」と独り言のように主人は何度も言う。 「そんなものは仕方がありませんから捨てて御仕舞」になって「新規に」もう一献飲んだらいいでしょうと言う。け 適当になぐさめて、「前より立優つた美しい猪口」を持ってきて酒を続けるように言う。けれど、主人は「猪口の破 続く段落では、せっかくの興も酔いも一瞬にして醒めてしまったように、この「猪口の缺け」を拾い集め、 |君はもちろん「太郎坊」の破損をいいことだとは思わないが、それほど重大なことだとも思っていない。主人を 「理の當然」を言う。だがやはり主人はがっかりとして、「物の命數には限りがあるものだナア」と嘆き続 妻に問う。そんなに細かく壊れてしまったのだからもう無理だろう、

細君は何日にない主人が餘りの未練さを稍訝りながら、

彼の皿 身皿の箱を落して、 した時、 | 貴方はまあ如何なすつたのです、 は古びもあれば出來も佳い品で、 傍で見て居らしつて、 十人前ちやんと揃つて居たものを、毀したり傷物にしたり一ツも満足の物の 過失だから仕方がないは、 今日に限つて男らしくも無いぢやありませんか。 價値にすれば其猪口とは十倍も違ひませうに、 と笑つて濟ましてお仕舞なすつたではありませんか 何時ぞやお それすら何とも思はない 鍋 無いやうにしま が伊 刺ぎ

り御酒が醒めて御仕舞なすつたやうですね。」

と激まして慰めた。それでも主人は何んとなく氣が進まぬらしかつた。しかし妻の深切を無にすまいと思ふて か、重々しげに猪口を取つて更に飲み始めた。けれども以前のやうに浮き立たない。

と矢張大層沈んで居る (ほ) 「どうも矢張り違つた猪口だと酒も甘くない、まあ止めて飯に仕やうか。」

そうした読み手の不審を作中で代弁する役割を細君が担っている。「今日に限つて男らしくも無い」とあるように、 時も「過失だから仕方がないは」と主人は鷹揚に笑っていたらしい。 ていたあの下女のことだろう、「お鍋」が「伊萬里の刺身皿の箱」を落として揃いのものを全てだめにしてしまった 主人は普段ものに未練を見せることのない人である。この作品の冒頭で「碓のやうな尻を振立てて」縁側の掃除をし 「なぜ主人は「太郎坊」が壊れたことにこのようにこだわるのだろうか」は読み手がここまで読んで抱く謎であり、

引けば「石部金吉」や「助兵衛」である。この中に露伴は、「お鍋」も収録している。 月・八月・九月・十一月・十二月号の「雑録」欄に連載していた。これは興味深い発想に基づく考証であり、 「太郎坊」が書かれた一八九九年、露伴は「當流人名辭書」を「太郎坊」が発表されたのと同じ媒体『新小説』の七 一般的な事物・事象を指すようになった例を集めたものである。たとえば、露伴が挙げる中からわかりやすいものを 「お鍋」は女中一般を呼ぶ言葉だが、この言葉について露伴が書いた別の文章があるので、それを見ておきたい。

おなべ。下女または醜き女をさしていふ。鍋釜をとりあつかふという縁より云ひ出したるか、 然らずば鍋のごと

むこと自体を止めてしまおうとする。

く黑しといふより云い出したるなるべし。江戸語。東京語(5)

れていると同時に、 つまり、ここに登場する「お鍋」という言葉は、「下女」の江戸口語・東京口語的な言い換えという意識で用いら 普通名詞的に用いられる人名の例として露伴が注意を払っていた言葉である。

直そうとしてももう「浮き立たない」。そして「どうもやはり違つた猪口だと酒も甘くない」と言い、今夜はもう飲 倍は違うものだろうに、なぜ「太郎坊」が壊れたことにだけそのようにこだわるのかと細君は言う。 執着は鮮明になっていく。「伊萬里の刺身皿」は、「古び」があり、出来もよく、「太郎坊」とは金銭に換算すれば十 てしまったと書かれることも、主人の気落ちと呼応するものであるかのようだ。主人は、一応は新しい盃で酒を飲み お鍋」がかつて壊した揃いの「伊萬里の刺身皿」がここに呼び出されることで、対比的に「太郎坊」への主人の 燗酒が 醒め」

あ人情だろうぢやないか」と一般論にして語る。 続く段落では、主人はまだ諦められない感情を「茶人は茶碗を大切にする、 しかし、こう妻に返されてしまう。 飲酒家は猪口を秘藏にする」「こりや

等は極上といふ手だ、 りませんが、 だつて、 今出してまゐつたのも同じ永樂ですよ。それに毀れた方はざつとした菫花 此方は中は金襴地で外は青華で、 と御自分で仰やつた事さへあるぢやあございませんか。」 工手間もかかつて居れば出來も好いし、 の模様で、 まあ永樂という中にも此 焼も餘り好くあ

つたものぢやあないのだ。」 一ウム、 しかし此猪口は買つたのだ。 去年の暮に己が仲通の骨董店で見つけて來たのだが、 彼の猪口は金銭で買

「では如何なさつたのでございます。」

「ヤ、こりやあ詰らないことをうつかり饒舌つた。ハハハハハ。」

と紛らしかけたが、不圖目を挙げて妻の方を見れば妻は無言で我が面をぢつと護つて居た。主人もそれを見て無い。

言になつて霎時は何か考へたが、やがて快活な調子になつて、

「ハハハハハハ。」

と笑ひ出した。共面上には既不快の雲は名殘無く吹き掃はれて、 其眼は晴やかに澄んで見えた。此の僅少の間に まだ」はれ

主人は其心の傾きを一轉したと見えた。

「ハハハハ、云ふて仕舞はう、云ふて仕舞はう。ひとりで物をおもふ事はないのだ、話して笑つて仕舞へばそれ

で濟むのだ。」

と何か一人で合點した主人は、言葉さへおのづと活氣を帶びて來た (16)

らないことをうつかり饒舌つた」と紛らわそうとするが、妻は次の言葉を黙って待っている。主人は少し考えるが、 ものぢやあないのだ」とうっかり漏らしてしまう。ではどのように入手したものなのかと妻に問われ、「こりやあ詰 喜んだ猪口であった。至極もっともなことを言っているように見える妻の言葉に主人は応じて、「しかし」と続け、 は「中は金襴地で外は青華で、工手間もかかつていれば出來も好い」もので、かつて主人本人も「極上といふ手」と さらに言えば「毀れた方」は「ざつとした菫花の模様で、焼も餘り好く」ないのに比べて、いま持ってきた「此方」 **- 此猪口」は半年ほど前の「去年の暮」に「仲通の骨董店」で買ってきたものだが、「彼の猪口」は「金銭で買つた** 壊れてしまった「太郎坊」も、新たに妻が持参し、いま「主人」の手に握られている猪口も「同じ永樂」である。

ばされるとする語り出しの文章と呼応する。加えて言えば、「不快の雲」が「吹き掃」われたというレトリックは、「い に言うのだろう。そうした上で、妻に「太郎坊」の来歴を語りはじめる。 は、なにか言いにくいことがこれから告白されるのだろうとも読み手に予想させる。だからこそ、主人の「云ふて仕 なぜ主人は「太郎坊」にこだわるのかという謎がこれ以降明らかにされていく展開とも機能論的に呼応する。「不快 に澄んで見えた」と語られる。吉成大輔も言うように、この文章は「太郎坊」冒頭にあった「雲の峰」が風に吹き飛 舞はう」は自分に言い聞かすように二度繰り返され、「話して笑つて仕舞へばそれで濟む」話なのだと先回りして妻 の雲は名殘無く吹き掃はれて」と描写されているとはいえ、「ハハハハハ」という笑い声の幾度にもわたる繰り返し 「快活な調子」になって「ハハハハハ」と笑い出す。その顔は、「既不快の雲は名殘無く吹き掃はれて、其眼は晴やか

しいやうで眞面目では話せないが。」 「ハハハハハ、お前を前に置いてはちと言ひ苦い話だがナ。實は彼の猪口は、昔己が若かつた時分、アア、今思 、ば古い、古い、アアもう二十年も前のことだ。己が思つて居た女があつたが、ハハハハ、何うもちツと馬鹿ら

と主人は一口飲んで

とも無く無かつたからといふ譯ばかりでも無かつたらうが、兎に角ある娘に思はれたのだ。思へば思ふといふ道 で全で茫然とした事だが、まあ其頃は乃公の頭髪も此様に禿げては居なかつたらうといふものだし、また色も少で素。ほそか て呉れ。ハハハハハ。まだ考のさつぱり足りない、年のゆかない時分のことだ。今思へば真實に夢のやうなこと しは白かつたらうといふものだ。何といつても年が年だから今よりはまあ優しだつたらうさ、いや何も左様見つ 「まあ好いは。これもマア、酒に醉つた此場だけの坐興で、半分位も虚言を交ぜて談すことだと思つて聞 いて居

理で、性が合つたとでもいふ事だつたが、先方でも深切にして呉れる、此方でもやさしくする。いやらしい事な 老人の言葉に、 かつたからであらう、父は直に娘の言葉に同意して、自分の膳にあつた小いのをも併せて贈つて呉れた。その時かつたからであらう、父は直に娘の言葉に同意して、自分の膳にあつた小いのをも併せて贈つて呉れた。その時 けれど差上げたう御坐います、ねえお父様、進上げたつて宜いでせう、と取り做して呉れた。もとより惜むほどけれど差上げたう御坐います、ねえお父様、進上げたつて宜いでせう、と取りなり ました、と悦んで話した。さうすると傍に居た娘が口を添へて、大層御氣に入つた御様子ですが、御氣に召しま のではないが了全の作で、 娘の父が乃公に對つて、斯う申しては失禮ですが此盃がおもしろいとは御若いに似ず御目が高い、これは佳いも 名なんぞ一ツだつて知つて居た譯では無かつたが、ただ何となく気に入つたので切とこの猪口を面白がると、 のだ。ところが其娘の父に招ばれて遊びに行つた一日の事だつた、此 盃 で酒を出された。まだ其時分は陶工の一一 ぞは毫も口に仕無かつたが、胸と胸との談話は通つて、どうかして一緒になりたい位の事は互に思ひ思つて居た 方を太郎坊、 したのは其盃の仕合せといふものでございます、宜しう御座いますから御持 歸 下さいまし、失禮で御座います の貴いものではなし、差當つての愛想にはなる事だし、また可愛がつて居る娘の言葉を他人の前で挫きたくもな 小さい方を次郎坊などと呼んで居りましたが、一ツ離して献げるのも異なものですから二つともに 菫のことをば太郎坊次郎坊といひまするから、 ざつとした中にもまんざらの下手が造つたものとは異ふところもあるやうに思つてい 此同じやうな菫の繪の大小二ツの猪口の、 大きい 其

のですが、何時になれば朝夕御傍に居られるやうな運びになりませうかなぞと責め立てて困りまする、 な心持で内 々人知らぬ樂みを仕て居た。また偶には其娘に逢つた時、 などと云つて戯れたり、 あの次郎坊が小生に對つて、 早く元の御主人様の御嬢様に 太郎坊が貴娘に御眼にかかりたいと申して お逢ひ申したい と云つて

む時には必らず今の太郎坊と、太郎坊よりは小さかつた次郎坊とを二ツならべて、其娘と相酌でも仕て飲むよう

其一つが今壞れた太郎坊なのだ。そこで乃公は時々自分の家で飲

進じませう、

といふので終に二つとも呉れた。

を語るなんでもない語彙(「ざつとした」)を共に用いることによって媒介されている。「娘の父」→「主人」という

紅い顔をさせたりして、真實に罪のない樂しい日を送つて居た。」

とってくれ、了全のものだと言って、男の「目」を褒める。永楽了全は徳川後期の名工のひとりである。その盃の印(18) は盃をより肯定する文脈である。この作中で直接に顔を合わせることない「細君」と「其娘の父」とが、「太郎坊 り、手の込んだものではないにせよ「まんざらの下手」が造ったものとは違う盃として語られている。「太郎坊」が できるように変わったのだろう。だが、かつての主人には、そうした趣味はまだなかった。古い陶器が面白いと感じ は「陶工の名」も幾らか知るようになり、「骨董屋」を覗く趣味も持っており、「極上」という価値判断を下すことも 楽の「極上」の猪口は、「去年の暮に」「仲通の骨董店」で主人が購入したものだったことを思い返せば、 に、「ただ何となく」そこで用いられている盃を気に入る。先ほど、「太郎坊」が割れた際に新しく妻が持ってきた永 ことは互いに思っていた。 はむろん妻にはわからないが、話をあまり深刻に受け止られたくないという主人の感情を描写したものだろう。 るようになったきっかけそれ自体が、ここで語られているのかもしれない。盃を褒める主人の言を娘の父は好意的に 興」の話として「半分位も虚言を交ぜて談すこと」と思って聞くように主人は妻に言う。 若い頃、主人には思い思われた娘がいたという話がはじまる。娘と主人とは、「どうかして一緒になりたい」位 二十年前の「太郎坊」にまつわる回想が、こうした長い告白の形態で語られはじめる。「酒に醉つた此場だけの坐 娘の父親の言葉によれば「ざつとした中にもまんざらの下手が造つたものとは異ふところもある」ものであ 妻がなぐさめとして主人に言った「ざつとした」はここに繰り返されているが、 娘の父に招かれた或る夜、男は「陶工の名なんぞ一ツだつて」知っていたわけではない 以降に語られることの虚 娘の父の言葉 現在

ここに用いられている。「菫のことをば太郎坊次郎坊といひまするから、此同じような菫の繪の大小二ツの猪口の、 流れで伝達されたひとつの言葉は、「細君」→「主人」という流れで再び伝達され、みたびいま、「主人」→「細君」 だとして、主人に盃を贈るように父親に言う。「其盃の仕合せ」のように、もの自体に意志があるかのような言葉が 父による名付けであった。 人がずっと「太郎坊太郎坊」と呼んで愛玩していたと以前に描写された盃の名前は、かつて相愛の関係にあった娘の 大きい方を太郎坊、小さい方を次郎坊などと呼んで居りました」という名付けの由来が娘の父の口から語られる。主 へと再話の形をとって反復的に伝達されている。娘は、このやりとりを見て「御氣に召しましたのは其盃の仕合せ」

考えると「太郎坊」において二つの盃が「太郎坊」「次郎坊」と名付けられることはやや複雑な名付けである。つま 定の盃の名前として固有名詞化されている。 り、「太郎坊」「次郎坊」は固有名詞のようだが「大和奈良」では菫一般を指す言葉としてまず存在し、それが再び特 際に使うもの、と露伴は解していたようだ(おそらく愛宕太郎坊天狗の伝説とこの言葉はあまり関係がないだろう)。 露伴がこの言葉を知ったのかはわからないが、「太郎坊」「次郎坊」という言葉を「大和奈良」で子供が菫一般を呼ぶ も見られる。そこでは露伴は、「太郎坊、次郎坊。大和奈良にて菫を指して云ふ兒童の語」と書いている。どこから(ユタ) |當流人名辭書|| が人名(固有名)でありながら普通名詞化した言葉を集める企図だったことは既に述べたが、そう この「太郎坊、次郎坊」という言葉に関する言及は、塩谷賛も指摘しているが先述の露伴「當流人名辭書」の中に

手の父に「盃」をもらう、ということに民俗学的な暗喩を読み取ることも可能だろう。「其一つが今壊れた太郎坊な のだ」という主人の言葉は、一瞬、時制が現在へ戻された言葉であり、なぜこの盃が壊れたことに執着したのかとい 「一ツ離して献げるのも異なものですから」と娘の父は言い、 ふたつの盃が男に贈られる。 結婚したいと考える相

う謎が徐々に明かされてくる。 ふたつの盃をもらったあと、 男は自宅でひとり飲む際も、うきうきした恋の気分にひたりながら「太郎坊」と「次

く気にいったものだから、了全だから、そういう理由は、主人のこの「樂み」にあっては副次的なものである。それ 郎坊」に酒をつぎ、娘と楽しく「相酌」でもしているかのような「人知れぬ樂み」を覚えるようになった。なんとな

らは、 娘との「相酌」の夢をそのとき彼に見せてくれたからかけがえのない一そろいの盃となった。そして「太郎

に仮託されたかたちで彼は恋をささやく。「貴娘に御眼にかかりたい」と「太郎坊」が言い、「早く元の御主人様の御 坊」「次郎坊」を題材にして娘をひやかした楽しい思い出も語られる。「太郎坊」と「次郎坊」を話題に出し、それら

て困る。こうした冗談は、「太郎坊」や「次郎坊」という名前が小さなふたりの男の子を呼ぶような響きを併せ持つ 嬢様にお逢ひ申したいのですが、何時になれば朝夕御傍に居られるやうな運びになりませうか」と「次郎坊」 が言っ

言葉であることで、より一層、生き生きした力を増す。「太郎坊」、「次郎坊」、そしてそれらをかつて創った「永樂

ことはない。このような顕名と匿名との布置は計算されたものだろう。こうして「罪のない樂しい」時間が過ぎてい 作中の「現在」を生きる人間の名前は明示されず、「娘」「娘の父」といった主人の回想の中の人間の名前も明される 「了全」がこの作品においては明確に名前が示されているのと対照的に、「主人」、「細君」、「お鍋」といった三人の

そこで告白は一度中断され、「今昔の感に堪へざるものの如く」額に手をあて、 一口主人は酒を飲み、 次のように

話を続ける

く。

左様斯様するうち次郎坊の方を不圖した過失で毀して仕舞つた。アア、二箇揃つて居たものを如何に過失とは、「きょから」

から直にまた思ひ返して、なんのなんの、心さへ慥なら決してそんなことがあらう筈はないと、窈に自から慰め なるような悲しい目を見るのではあるまいかと、痛く其時は心を悩ました。然し年は若し勢ひは強い時分だつた

だ、と言う(禿頭をめぐる言及は、この作品の中では幾度も繰り返される)。かつての恋のことを「今のことぢやあ る。 なってこんな話をするのもおかしいし、つい先日も宴会で雛妓に禿げ頭を冷やかされたが、もう腹も立たない年齢 断され、地の文で主人のこの話を「興有りげに一心になつて」聞く妻が描写され、「梧桐を動かしてそよそよと渡る 7 無いから何にも彼も笑つて濟む」とも言う。続いて次のような言葉が語られる。 れのアナロジーを見るからである。「相酌」の夢を彼に見せてきたふたつの盃の片方、「次郎坊」が壊れたことによっ 特別な意味を持つ「二箇揃つて居た」はずのものが「一箇」となったことにいやな予感を彼は覚える。ここに別 いずれ可能になるはずと思われた「相酌」自体の先行きが「悲しい目」になるのではないかと彼は不安にかられ しかし「年は若し勢ひは強い」若き日の主人は、「心さへ慥なら」とその不安を振り払う。ここで再び告白は中 「極々静謐な合の手を弾いている」と語られる。再び主人の回想の語りがはじまる。頭が禿げてしまった齢に

で、マア、其娘も己の所へ來るといふ覺悟、己も行末は其女と同棲にならうといふ積りだつた。ところが世 なければならない、強ひて情を張れば其娘のためにもなるまいという仕諠に差懸つた。今考へても冷りとするや の御定まりで、 思ふやうにはならぬ骰子の眼といふ習ひだから仕方が無い、 何うしても斯うしても其の女と別れ

る酒 ところは一つ殘らず思ひ出す、未練とは悟りながらも思ひ出す、何様しても忘れきつて仕舞ふことは出來ない に迷ひは惹かぬつもりで、 左様かと云つて其後は如何いふ人に櫞付いて、何處に其娘が如何生活しているかといふことも知らない。 郎坊や次郎坊の言傳をして戯れて居た其時と些とも變らず心に浮ぶ。氣に入らなかつたことは皆忘れても、 も月が經つても、 なつたのは情け無いと、 うな突き詰めた考へも發さないでは無かつたが、 |ひは惹かぬつもりで、今日に滿足して平穩に日を送つて居る。ただ往時の感情の遺した餘影が太郎坊の湛に知ろうとおもふ意も無いのだから、無論其女を如何斯様しやうといふやうな心は夢にも持たぬ。無かつた# 女とはたうとう別れて仕舞つた。 の上に時々浮ぶといふばかりだ どういふものか忘れられない。別れた頃の苦しさは次第次第に忘れたが、 太郎坊を見るにつけては幾度となく人には見せぬ涙をこぼした(中略) ああ、 何時か次郎坊が毀れた時若しやと取越苦勞を仕たつけが、 待てよ、 周章ところで無い、と思案に思案して生きは生きた ゆかしさは矢張り太 然し歳が經つて 其通りに ば つた櫞 かり

殺しようとまで考えたという意味だろう。 う様にはならぬ骰子の眼」と語られるのみである。「今考へても冷りとするやうな突き詰めた考へ」は、そのあとに 「生きは生きたが」と続けられているので、主人ひとりでのつもりか、娘と一緒にというつもりかはわからないが自 ここでは、この二十年前の主人の恋がどのような理由でだめになったのか、それは一言も述べられない。ただ「思

の夢を見させたふたつの盃のひとつはすでになく、「太郎坊」がただひとつ手許に残った。「太郎坊」に、失った恋の ここで、恋を失った主人の手元にただひとつ残った「太郎坊」が非常に強い印象を伴って回想の 「前表」として受け取られた「次郎坊」の破損は、その暗示通りに機能してしまうこととなった。 語りの かつて「相酌 单 ・に現れ

う遠慮から無理に語ったものでもないだろう。それでも、かつて贈られた「太郎坊」に酒を注いで飲むとき、 に「往時の感情の遺した余影」が見える、と主人は言う。続けて、次のように語る。 娘のそれからを知りたいという考えは起きないという言葉は、 その一方で、二十年経た現在、娘のそれからは知らないし、 名残りを今日まで二十年間、彼は見ていた。「太郎坊」がこう言っていた、「次郎坊」がこう言っていた、そのように の前半部に描写される生活の安定した雰囲気を思い返せば、「今日に滿足して平穩に日を送つて居る」という言葉や. 女と戯れていた「罪のない樂しい」時間の「ゆかしさ」が「心に浮ぶ」。どうしてもそれを忘れることはできない。 知りたいという考えも起きないと主人は言う。この作品 あながちこの話を聞かせている相手が現在の妻だとい 酒の上

人の一代といふものは、 もの一つとなつて仕舞ふたかとおもへば、 居やう、唯太郎坊ばかりが、 で居たが、談すには及ばないことだから此仔細は談しも仕なかつた。此談は汝さへ知らないのだもの誰が お前が家へ い月日の力だ。 ツ二ツと轄が脱けたり輪が脱れたりして車が亡くなつて行くやうに、 かつた、暖かで燃え立つやうだつた若い時の總ての物の紀念といへば、ただ此の薄禿頭、 も今宵を限りに此世に無いものになって仕舞つた。其娘は既二十年も昔から、 ふたことやらも知れぬものになつて仕舞ふ、わづかに殘つて居た此の太郎坊も土に歸つて仕舞ふ。花やかで美し 来てからももう彼是十五六年になるが、己が酒さへ飲むといへばどんな時でも必らず彼の猪口 身にも替へまいとまでに慕つたり、 思へ ば不思議のものぢやあ無い 太郎坊の傳言をした時分の乃公を能く知つて居るものだつた。ところで此の太郎 ははははは、月日といふものの働きの今更ながら強いのに感心する 浮世を憂いとまでに迷つたり、 か。 頭が禿げるまで忘れぬほどに思ひ込んだことも、 段々消ゆるに近づくといふは、 存命へて居ることやら死んで仕舞 無い櫞は是非もないと悟つた お恰好の紅絹のやうな はて恐ろし 一で飲む 知つて

に留まらぬと聞いて居たが、ほんとに左様だ。ハハハハ。どれどれ飯に仕やうか、長話しを仕た(22) と昔時のことを繰返して考へ出したのもいよいよ可笑しい。ハハハハ、氷を弄べば水を得るのみ、 往時に返つた。 りしたが、 まだ何所ともなく心が惹かされて居た其古い友達の太郎坊も今宵は摧けて亡くなれば、 今の今まで太郎坊を手放さず居つたのも思へば可笑しい、 其の猪 口を落して摧い てそれ 花の香は虚 戀も起らぬ

によって「太郎坊」と名前をつけられたこと、②娘が「其盃の仕合せ」と意志があるかのように言いながら盃を贈る 固 手筈にしてくれたこと、 が、「太郎坊」という盃だけが昔の自分を「能く知つて」いるのだと言う。こうした擬人的な言い方は、 太郎坊ばかりが、 らないのだから誰が知っているだろうか、と主人は妻に向かって反語を使う。だが一つの盃だけは例外である。 つた若い時の總ての物の紀念」はいまや「薄禿頭」だけになってしまったという諧謔は、そのまま裏返すことができ た。「わづかに殘つて居た此の太郎坊も土に歸つて仕舞ふ」のである。「花やかで美しかつた、 れてきたことで真に迫るものとなっている。だが、「太郎坊」も「今宵を限りに」「此世に無いもの」になってしまっ の盃を呼び続けたこと、 「有名は書かれないこと、これらの幾重にも用意された細部の延長にあるものであり、 娘との恋を失ったのが二十年前と語られ、一方で妻に「お前が家へ来てからももう彼是十五六年」と語るので、娘 .来事から四五年ののちにこの二人は夫婦になったのだろう。 彼は「酒さへ飲むといへばどんな時でも必らず」、「太郎坊」で飲んでいた。この話を「汝さへ」今日まで知 太郎坊の傳言をした時分の乃公を能く知つて居るものだつた」。自分以外の人間は誰も知らない ③主人が盃の言葉を仮構して娘に冗談を言ったこと、④主人が「太郎坊」という固有名でこ ⑤盃そのものの名前とそれを創った人間の固有名が明示される一方で、 彼は「太郎坊」の来歴を今日まで妻に語らな そのように細部が積み重ねら 暖かで燃え立つやうだ その他 0 1 节 娘 人物 0)

坊」は「古い友達」なのであり、その「古い友達」が「摧けて亡くな」ることによって、二十年に渡って服してきた る。つまり今日まで二十年の間に渡って「花やかで美しかつた、暖かで燃え立つやうだつた若い時の總ての物の紀 て居た其古い友達の太郎坊も今宵は摧けて亡くなれば、戀も起らぬ往時に返つた」と語られる。主人にとって「太郎 いた唯一のものは今夜、潰えてしまった。再び「太郎坊」は人であるかのように「まだ何所ともなく心が惹かされ 念」として、「太郎坊」が主人に所有され愛用されていたことを語っている。過去の恋の名残りを形によって留めて

この短い小説は次のように終わる。

恋の喪が明けていくような感覚を主人は語る。

細君は笑ひながら聞き了りて、 「それほどまでに思つていらしつたものが、一體まあ如何して別れなければならない機會になつたのでせう、何 一種の感に打たれたかの如く首を傾けた。

とは思わず口頭に迸つた質問で、勿論細君が一方ならず同情を主人の身の上に寄せたからである。然し主人は其 かそれには深い仔細があつたのでせうが。」

の質問には答へなかつた。

も立たぬ詮議といふものだ。昔時を繰返して新しく言葉を費したつて何になろうか、ハハハハ、笑つて仕舞ふに くなつて仕舞つた。水を指さしてむかしの氷の形を語つたり、 て呉れるものが有るものか。 だとも真實だとも云ひ得る者があるものか、そうしてまた乃公が苦しい思ひを仕た事を善いとも悪いとも判斷し 唯一人遺つて居た太郎坊は二人の間の秘密をも悉しく知つて居たが、それも今亡し 空を望んで花の香の行衛を説いたところで、役に

越したことは無い。云はば恋の創痕の痂が時節到來して脱れたのだ。ハハハハ、大分好い工合に酒も廻つた。可以

い、可い、酒は既澤山だ。」

と云ひ終つて主人は庭を見た。 一陣の風はさつと起つて籠洋燈の火を瞬きさせた。 夜の涼しさは座敷に滿ちた(23)

聞けばもう少し複雑な感情が起こりそうにも思うが、それが語られることはない。 ば「必ず」用いた盃が、 語られない。妻は 然ながら省筆されている部分も多い。妻は夫の告白をどのような気持ちで聞いたのかということについても、 らず同情を主人の身の上に寄せたからである」と述べられるのみである。 れなければならなかった理由はなにかと、思わず主人に聞く。妻の感情は、語り手によってただ「勿論細君が 太郎坊」は本論冒頭でも述べたように四百字詰め原稿用紙で二十枚前後の小品として仕上げられているので、 「笑ひながら聞き了りて、 かつての恋愛の相手の父親に贈られたものであり、失った恋の名残りを酒に浮かべていたと 一種の感に打たれたかの如く首を傾け」、そのように思っていたのに別 夫が結婚してからもずっと酒を飲むといえ 多くは 一方な 当

終える。場所を移動した描写がここまでに無いのでおそらくまだ縁側にいるのだろう、主人は庭を見る。 くなつて仕舞」ったという感覚が表明される。だからいまそれをここで語ってもしょうがないと主人は言う。 「二人の間の秘密をも悉しく知つて居たが」という言葉が間に挿入され、「太郎坊」と「秘密」いずれも同時に ひとり遺つていた太郎坊は二人の間の秘密をも悉しく知つて居たが、それも今亡しくなつて仕舞つた。」と言う。「唯 - 太郎坊」が壊れたことに非常な落胆を感じていた主人は、「云はば恋の創痕の痂が時節到來して脱れたのだ」と話を 一人」「遺つて居た」として、またしても、「太郎坊」を人間のように語る。この文章の主語は「太郎坊は」だが、 一十年前に何があったのかという妻の問い(これは読者の問いでもある)に主人は答えない。 その代わりに、 小説冒頭が 唯

せ」、「夜の涼しさ」は誰もいない「座敷に満ち」るのである。

入道雲を吹き払う風の描写によってはじまったことに応じるように「一陣の風はさつと起つて籠洋燈の火を瞬きさ

年間、具体的な形態を伴って、自分自身が生きた過去の恋愛の記憶を主人の前に現前させ続けていた陶器であり、そ 美しかつた、暖かで燃え立つやうだつた若い時の總ての物の紀念」といった言葉に端的に示されているように、二十 味での「骨董」ではない。「往時の感情の遺した餘影が太郎坊の湛へる酒の上に時々浮ぶ」という言葉や「花やかで 憶そのものが潰えるような出来事として描かれる。 れゆえに主人に執着を抱かせていた陶器であった。「太郎坊」が潰えることは、盃という陶器の形をとった過去の記 この作品で中心的に語られ、またタイトルともなっている「太郎坊」はどのような陶器だろうか。それは普通の意

## 三、「主人」=露伴という読まれ方

以下、「太郎坊」という小説がどのように読まれてきたかについて簡単に見ておく。 このように「太郎坊」で提示される「主人」の姿と書き手である露伴の実生活を重ねる理解もあったようである。

安」 「付燒刃」四編は発表年代順に並べられているわけではない)。 茂吉は「解題」において、この短編集に収めた 特に収録作品に選び、なおかつ巻頭に置いたのは、茂吉の編集による(ここに収められた「太郎坊」「夜の雪」「不 九五三)である。一九三六年、岩波文庫から『太郎坊 「太郎坊」という作品の評価に重要な役割を果たした人物は、露伴を敬すること深かった齋藤茂吉(一八八二―一 他三篇』として露伴の短編集が刊行された際、「太郎坊」を

兀 味すべきもののみ」を収めた、 編は岩波文庫から既に刊行されていた「風流佛」「五重塔」などと比べて「また別な趣致」 とする。また、 これら四作は露伴の作品の中では「輕い側」に属するものだと言う。 があるもので 「咀嚼翫

のゆたかなる」点が露伴のそれ以前の作品との相違点であるとも書く。

「太郎坊」に関しては、文章が言文一致体によって書かれていることに触れ、

「筆さはりの如何にも輕い、そして餘韵

茂吉は「太郎坊」について別の文章で次のようにも述べている。

が、 郎坊』 は三十二歳の時の作である。 こんど岩波文庫に、 三十四歳といへば未だ青年であつて、 を讀 んで、 その主人公を露伴翁に當てはめたりして、 露伴翁の短編四つを収めたが、 私がまだ歌をはじめなかつた頃は露伴ものに親しんだもので、 如何に翁が年若くしていい為事を成して居られたかがわ その内の もつと年寄つた人のやうに空想してゐ 「太郎坊」 は三十四歳 の時の作であり、 新小説に載つた であ 夜の雪」

集』(一九四七、 成した作家として露伴を思い描いたようだ。ただし茂吉は、これも「太郎坊」を収めた『近代日本文学選 が当初、「太郎坊」の「主人」と書き手である露伴本人とを重なるものと空想しながら茂吉は「太郎坊」を読み、 ていたらしい。 れているように 茂吉が十代の頃から、 無論、 東方書局) 『新小説』に掲載された「太郎坊」の初出を読み「その主人公を露伴翁に當てはめ」る「空想」をし この作品の「主人」より執筆時の露伴が若いことは、ここで茂吉も述べている通りである。 露伴と鷗外の作品に特に親しんだことはよく知られている。若い頃、 の解説においては、自分がそのように「太郎坊」を読んだというニュアンスで書かない。 茂吉は、ここで述べら

概にしりぞけてはならぬだらう (28) (28) までモデルといふことを念中に置くことがあり、そのために観賞を深めることもあるから、さういふ批評も一度までモデルといふことを念中に置くことがあり、そのために観賞を深めることもあるから、さういふ批評も一 の性格があざやかで、讀者によつては、作者を彷彿せしめているなどと云つたものである。 (引用者補・「太郎坊」は) 制作の年からいへば、「夜の雪」などと同傾向のものとおもはれるが、この方は主人 鑑賞の場合にある程

にとっては印象深い小品で、露伴の作品集を作る編集仕事二種(岩波文庫、近代日本文学選)が来たとき、特に推し な佳篇の一つとして選んで置いた」とも言う。「太郎坊」は今日までそう重要な作品として扱われていないが、(2g) 程度存在したのかもしれない。茂吉はこの解説では「太郎坊」を「分かり易い部類に属するけれども、愛すべき大切 だともとれるが、「太郎坊」という作品に関しては、「主人」=露伴という読まれ方は、茂吉ひとりのみならず、ある てどちらにも収録させたようだ。 ここでは自分の「太郎坊」評価ではなく他人の評価のように書いている。すこしはにかんでここではこう書いたの 茂吉

挙げている。この二人の関係は、文学上の師弟関係か恋愛関係かはもはやわからないとしながら、塩谷は恋愛関係に なった話になっていることを述べる。これに加えて塩谷は、露伴の若い頃の恋愛の記憶が反映されたものではないか(30) 言う「讀者」とは塩谷のことかもしれない。塩谷は、まず、「太郎坊」という作品は、露伴「心融師の歸元鏡」(初出 未詳)で言及される『歸元鏡』の一つの話から着想されたものではないかと推測し、しかしその発想源とは大きく異 このように「主人」の姿を露伴その人に還元していく「太郎坊」理解は、塩谷賛により強く見られるので、 知りあい、当時恋愛関係にあったのではないかと推測できる人物として、齋藤紫瑩 私小説的に「太郎坊」を読もうとしていた。 評伝 『幸田露伴』において塩谷は、 (本名・瑩、生没年不明)を 露伴が若い頃(一八九〇年

う作品を理解していた。

近いものと解釈している。二人の関係に関して露伴の妹・安藤幸はかつて次のように述べた。

二人姉妹の姉で、その妹の齋藤悦は上田敏氏に嫁いだ人である (32) しば訪ねてきたので、私たちとも知りあひになつたが、長女で跡とり娘なので、のちに養子を迎えた。 よみ、 伴兄はかなり好意をよせてゐたようである。やがて露伴兄が谷中に家を買つて神田末廣町を去るまで塋子はしば 藤紫塋と號し、さういふ名で手紙などもかいてきたが、字もなかなか上手できれいであつた。この塋子には、 美しい令嬢は双子木綿の問屋の愛娘で、齋藤瑩といつた。髪は高島田にゆひ、 が多くなつた。 た美人であつた。双子問屋の娘としては今おもつてもふしぎなほど学問ずきで、小説ばかりでなく佛教書なども 刹那」や「風流佛」や「對髑髏」ができて文名にはかに高まるにつれて、末廣町宅露伴兄を訪ねてくる人々 露伴兄も瑩子があふたびによく本をよんでゐると感心してゐた。この「お塋さん」はいつのころからか齋 そのなかにひじやうに美しい娘がゐた。いつも俥できて俥をまたせて露伴兄と話しあつた。この 鼻がたかく、 からだがすんなりし 齋藤瑩は

なったということに関して一言補えば、塩谷も書いているが、(33) る」という言葉を見ると、塩谷が言うように恋愛関係にあったのかもしれない。 一九〇八年であり、 ここに間接的に写された露伴の言葉「よく本をよんでゐる」や、安藤幸が言う「かなり好意をよせてゐたようであ 上田敏の京都帝国大学赴任と同年である。塩谷は、齋藤紫塋と露伴との関係から「太郎坊」とい 露伴が京都帝国大学国文科に講師として招かれたのは 紫英の妹・悦はやがて上田敏 の妻と

ならなくなって別れたのだと思う。ただし証拠は何もない、すべて私の想像なのである

に従って「太郎坊」の作中人物を当てはめていけば、主人=露伴、娘=齋藤紫瑩、 子が病没するまで良好な夫婦関係を保った。塩谷自身も言うように「証拠は何もない」が、塩谷の言うモデルの推測 露伴は 「太郎坊」が執筆された一八九九年の四年前、一八九五年、 山室幾美子と結婚している。一九一〇年に幾美 妻=山室幾美子、という読み方も

いるという指摘も出来る。 仮にこうした読み方をするのであれば、露伴のずっと後年の作品でやや私小説的な傾向のあるものに「蘆聲」(一 が挙げられるが、 語り出しのみ引くが、次のようなものである。 その冒頭に述べられる生活の型と「太郎坊」冒頭に提示される主人の生活の型がよく似て

可能になるかもしれない。

今を距ること三十餘年も前の事であつた。

今に於て回顧すれば、其頃の自分は十二分の幸福といふほどでは無くとも、少くも安康の生活に浸つて、朝夕

を心にかかる雲もなくすがすがしく送つていたのであつた。

倦んだ時分には、そこらを散したりしたものであった。 了つて、それから後はおちついた寛やかな氣分で、 るほどの夙さに起出て、そして九時か九時半かといふ頃までには、もう一家の生活を支へるため 心身共に生氣に充ちてゐたのであつたから、毎日毎日の朝を、まだ薄靄が村の田の面や畔の樹の梢を籠めてい 讀書や研究に從事し、 或は訪客に接して談論したり、 の仕事は終えて

目的としないので、陶器の描かれ方を中心に見ていく。

のを併せて読んでいたことで、茂吉や塩谷は、「太郎坊」の主人を露伴本人に引きつける理解をしたのかもしれない。 自分が為るだけの務めを爲て了つてから、適宜の労働をして」と主人が語る「太郎坊」とよく似ており、こうしたも でには、もう一家の生活を支へるための仕事は終えて了つて」午後は自由に過ごした、という生活の型が「その日に 部に使ったものである。「雲」のイメージが語り出しにおいて提示されていることと、「九時か九時半かとい 一九二八年時点での「三十餘年も前の事」であるから、ちょうど露伴が「太郎坊」を書いた頃の生活を小説の材 ふ頃ま

## 四 女人としての陶器、「さうかなあ、そんなに君は弱い人だつたかなあ」

置をはっきりさせたい への感覚とまったく方向の違うものを描いている他作家の作品を手短に取り上げ、対比的に露伴「太郎坊」の位 直接の影響関係が指摘できるわけではないものの、 いままで論じてきたような露伴 「太郎坊」に見られ

置き換えてみる場面から語り起こされ、愛陶の感情をさまざまに語ったあとで、避暑先でも壺を眺めていたいと思 原稿用紙に換算して三十枚程度の分量である。この一篇には筋らしい筋はない。収集している壺の配置をさまざまに 東京の美術商への紹介状を書いてやる。ほぼ、それだけの話である。ここでは「陶古の女人」の作品論を行うことは かなり安い値段で買い取ってくれないか、と言う。青年が提示する値段ならば買えたが、それも悪いような気がして て壺をひとつ携えて軽井沢へ行く。そこに青年が素晴らしい壺を売りにくるが価値がわかっていないらしく相場より 室生犀星に「陶古の女人」と題された小説とも随筆とも言い難い小品がある(「群像」一九五六・十)。 四百字詰め

をさめたかつた。慾張りで執念ぶかいのである。一句といふものは一つあてに飾装せられるべきであり、 という數がいかに面白くない数であるかが判る、三という數の平均美が保たれると、彼はそこに同じ背丈の壺に 釣合を見て、据ゑた。各陶の惹きあふ美と形とは、肩をくみあはせて、うたふがごときものがあつた。なるべく かしつづめにゐた。かれらは最後に三つあてに据ゑられ、それを四個に集めてながめることは出來なかつた。四 力を失ふので、また別々に引き放して飾つて見たりした、何の事はない相當重みのある陶器をけさからずつと動 どうしても一個の形態でさだまらない場合、二つあてを捉へ、二つの壺が相伴はれて置かれると、二つともに迫 けふも鬱々としてまた愉しく、何度も置きかへ、置く場所をえらび、光線の來るところに誘はれて運び、或ひは それが本來のものだが、彼はつねにそれらを一どきに眼に

三つ据えられた壺が「惹き合う」さまは「肩をくみあわせ」「うたふがごとき」ものであるとして、書き出しから壺 の置き場所や配置を修正していくというさまが書かれる。だが、陶器の中には他のものと並べられることを拒むよう が人間であるかのように語られる。三つ並べてみたのは複数の壺を「一どきに眼にをさめたかつた」からである。 よいだろう)が試みる姿から語り出される。ふたつ並べてみると共に迫力を失うように思え、引き離したりする。結 次の段落のはじめでは、彼が朝まず眼にするのも、夜最後に眼にするのもいづれも壺であると語られ、 壺をどのように並べるかの配置を「けさからずつと」「動かしつづめ」でさまざまに「彼」(犀星の分身と考えて 三つ並べることでそこに調和が生まれたように彼には思われた。三つの壺を受ける主語は「かれらは」であり、 毎日、 陶器

なものもあると彼は思う。ひとつの雲鶴青磁の壺である。

壺よりはるかに早く、夜明けがみとめられる。彼はあたらしいきれでよく拭いてやるのである(38 して何時も溶けてゐるし、うすい乳綠の世界は人間の肌より冷たくこまかい、明りをとりこむことの速さは他 をもとめてみると樂に現わせるものに思へた、 方は胡麻化しであつて悉皆の表現がおよばないやうだが、全くそれはすぐれた綺倆をもった女の人に、 ものを見せてくれるものであつて、或る意味では自然にも人間にも見つけれないものを持つてゐた。 れはもはや陶器であるよりも、 ひとりで超自然の形をとりたがつてゐることが判り、きのふ、ならべて見た間違ひを發見するわけであつた。こ 昨日はやうやうに繪高麗と仲よくならんでゐたものも、今朝見るとならべた方に間ちがひがあつて、 たとへばどのように優しい物を持つて來ても、 絶えず一つの威厳と優美をそなえへたもの、人間の顔とか、 かすかな微笑のやうなものである。瓶史は永いし圓みはとろりと 雲鶴青磁は友を厭ひ、伴れを拒んでひとりでゐたがるのである。 顔の中にある柔しい こんな言ひ

語っている。「或る意味で」人間にも自然にも見出せないと言いつつ「女の人」と言っているのはやや矛盾している にも」見出すことのできない「威厳と優美」を青磁の壺に見出し、それを「すぐれた綺倆をもつた女の人」の比喩で たもの、人間の顔とか、顔の中にある柔しいものを見せてくれるもの」として彼の眼に捉えられる。「自然にも人間 と意志のある人間のように犀星は書く。この雲鶴青磁は、「陶器であるよりも、絶えず一つの威厳と優美をそなえへ し、「彼」自身もこの言葉に不足を感じながらも、雲鶴青磁の陶器と「女の人」との「類似」を認める。冒頭の三つ ここにおいても「ひとりでゐたがるのである」「仲よくならんでゐた」「ひとりで超自然の形をとりたがつてゐる」

みはとろりとして何時も溶けて」おり、「うすい乳緑の世界は人間の肌より冷たくこまかい」とも語られる。 並べられた壺を受ける主語は「かれら」であったが、この雲鶴青磁は「女の人」に似たものとして言及される。「圓 女性に

類似を求めながら、それを越えるようなものとしても語っている。

を持って旅行へ行くのははじめての経験だと書かれる。旅行に壺を持っていくことを「他人にちよつと口にしがたい 間に壺を据えると「高い山の明り」に素直になじんで見えた。と、ここで彼は青磁に新たな「にふ」(ひび)が入っ 氣持の甘え方」と感じながら、車掌室にこの鞄を保管してもらい、彼は軽井沢まで運んできた。軽井沢へ着き、床の はなにも入らなかったらしい)、持っていく話になる。それは旅行先の目覚めにこれを見たかったからであり、 続く段落では、「彼」が軽井沢へ避暑に向かう際、鞄へこの雲鶴青磁の陶器一個をつめ (鞄に入れるとそれ以外に

人間 ては、この壺はとはいはずに、この人とか、あの人とか呼ぶやうになつてゐたから、 につたはり、時計のやうな神經質な青磁のにふのあるところに、永い間かかつて震動をつたへて行つたものと ろに毛布の折目を廻し、打つつけても動かないやうに固くとぢていた。震動は鞄をとほして幾重にもまいた毛布 の上に鞄を置いて気づかはれる震動をふせいでゐた。鞄の中では一枚の毛布をくるくる捲いて、底にあたるとこ 加へしめた。 一の心のこまかいはたらきに似た高麗青磁のやさしさは、 思へなかつた。 あたらしいにふを生じたものとしか思へなかつた。彼は車掌室を見聞したときに雑誌四五册をならべ、そ さうかなあ、 女性のやうなこの古陶の美しいもろさが、彼の驚きにこまかい更に別様なこの そんなに君は弱い人だつたかなあ、と、 列車の震動のこまかい不自然さに、つひに惹きい つぶやいた。 彼も彼の家人も壺にたいし 彼はこのよわい人が何故に い陶器

さ」「生きてゐるやう」と裏返して肯定していく。

\_\_(w) 震度がつたはつてにふに異變はあり得るものにおもへた。まるで生きてゐるやうなものだ、 えて深まつたことには悲しまない、にふといふものはちょつと動かしただけで伸びることもあらうから よわいかといふことの原因では、うつくし過ぎるためにそのやうにもろく弱いとしてゐた。彼はにふがさらにふ 風邪を冒いた女の子 列車

うなものである」と語っている。 を冒いた女の子がちよつと快くなつて、外の空氣にふれただけで冒き返すこと」にたとえ「この人は風邪を冒 されている習慣らしい。「このよわい人」(雲鶴青磁)が「よわい」理由は彼の理屈では「うつくし過ぎるためにその 陶器の魅力」を見出したような感情を抱く。倒錯しているようにも思えるこうした感情から、彼は「さうかなあ、そ 古陶の美しいもろさ」と捉える。「にふ」を見つけた驚きの感情に加えて、「美しいもろさ」という「更に別様なこの が語られる。毛布を巻き、雑誌を敷くというように対策はしてきたはずなのにそれでも「あたらしいにふ」は生じて やうにもろく弱い」ということになる。そして「にふ」が増えることを「まるで生きてゐるやう」だと思う。「風邪 んなに君は弱い人だつたかなあ」とつぶやく。こうして陶器を人のように言うのは、彼のみならず彼の家人にも共有 ふ」が生じたことを悲しむわけでもない。むしろ列車の振動で「にふ」を生じてしまったことを「女性のやうなこの 人間の心のこまかいはたらきに似た高麗青磁のやさしさ」が列車の振動へひきいれられて「にふ」が生じたこと 読み手の予想を裏切って、「彼」は愛蔵している雲鶴青磁を軽井沢へ持参したことを後悔もしないし、「に 通常であればほぼ肯定的に考えられることのない「にふ」の発生を「美しいもろ いたや

に買ってほしいのだと言う。その青年が包みをほどき、見事な梅瓶を彼が目にする場面は、次のように描写される。 数段落を挟んで、ある青年が「彼」のもとを訪ねてくる。金銭に困っており亡父の遺愛の雲鶴青磁の梅瓶を特に「彼」

裸になつた羞かしさを見たことがはじめてであつた (4)全く除けられてしまふと、そこにははだかの雲鶴青磁が肩衝もなめらかに立つてゐるのに見入つた。 そして黄いろい絹の包の下から、 突然とろりとした濃い乳緑の青磁どくとくの釉調が、 ひろがつた。 彼は陶器が 絹のきれが

羞かしさ」は陶器の側の感情として描写されている。 が目にするのは に入って来る。「そこにははだかの雲鶴青磁が肩衝もなめらかに立つて」おり、彼はそれに見入る。それと同時に彼 黄いろい絹の包の下」に隠されていた梅瓶の「とろりとした濃い乳綠の青磁どくとくの釉調」は「突然」彼の眼 「陶器が裸になつた羞かしさ」であり、彼はそれを「はじめて」見たと思う。ここでは「裸になつた

は、 れた陶器である。「陶古の女人」という作品は、陶器それ自体にエロティシズムを感じるような感覚を描いている。 に見られるのは、 り陶器の表情が変わることも(それは広義での破損である)、「生きてゐるやう」という言葉で肯定されていく。ここ 以上、四点からのみの引用だが「陶古の女人」の陶器描写を確認してみた。室生犀星「陶古の女人」における描写 弱さなどである。「もろさ」があることは美しさと結びつけられ、「魅力」として語られる。陶器に「にふ」が入 端的に言って陶器を女性として見出そうとするものである。 その物質としての特性を「女性的」と捉えた犀星の眼によって擬人化され、 陶器の中に「彼」が見出しているのは、丸み、もろ 壊れることさえ肯定さ

され、実用にも供される陶器であった。

## おわりに

器であった。それは、過去の恋愛の記憶を残存させ、かつ「もの」として現前させるような陶器である。 えば、犀星「陶古の女人」のように形態的な特徴が先行して愛蔵されるのではなく、ごく個人的な来歴によって愛蔵 他方、 先述のように、露伴「太郎坊」に描かれた盃は、まず「主人」の具体的な過去の恋愛の記憶と結びつい 対比的に言 、た陶

陶器である。二十年、愛蔵した太郎坊が壊れてしまう夜は、「恋の創痕の痂」が「時節到來して脱れた」夜であった。 暖かで燃え立つやうだつた若い時の總ての物の紀念」という言葉にあるように、かつての恋の無言の証人をしていた れば、この盃は「二人の間の秘密をも悉しく知つて」いる「古い友達の太郎坊」なのであり、「花やかで美しかつた、 るように、この盃そのものに女性性を見出すような感覚は「太郎坊」という作品には描かれない。作中の言葉を用い とはいえ、過去の恋愛の記憶を現前させるような陶器であると言っても、「太郎坊」という名前がすでに示してい

## 註

1 塩谷賛−露伴作−太郎坊」と−土偶木偶」」『文学』四○、岩波書店、一九七二・五、六五八−-六六二 吉成大輔「幸田露伴「太郎坊」成立とその周辺」『緑岡詞林』二十八、青山学院大学、二〇〇四・三、二三―三五 塩谷賛「太郎坊」 「幸田露伴 中』中公文庫、 一九七七、 四六一五八

太郎坊」初出時の書誌は、 稲垣達郎・紅野敏郎編『新小説総目次・執筆者索引』日本近代文学館、 一九八九、 五五―五六に

- 2 芹沢俊介「露伴が描いた「労働」」『春秋』五一八、春秋社、二○一○・五、二三一二六
- 3 ただし吉成の論考の後半では、部分的ではあるが本文分析をした箇所もある
- $\widehat{4}$ 幸田露伴「太郎坊」『露伴全集』第三巻、岩波、一九七八、二五三、傍線引用者
- (5) 前掲吉成、二三
- (7)前掲露伴全集第(6)前掲吉成、三二
- (7)前揭露伴全集第三巻、二五二―二五三、傍線引用者
- (8)「人は好し、情は有り、その道には賢し、罰も利生もある真によい師匠ぢやが」幸田露伴「椀久物語」『露伴全集』第五巻、 波書店、一九七八、四七八
- (9) 前揭露伴全集第三巻、二五四、傍線引用者
- (10)前揭露伴全集第三巻、二五四—二五五、傍線引用者
- (11) 前掲塩谷文学論文、六五八。なお、塩谷の文章は、以下のように続く。

南方は不毛の地でけぬきということになるのである(同、六五八) ただ読むには一向不自由がない。作者のほうはというとひねったもので、南方は不毛の地という成句があるところから きと読むとしてあるんだからそう読んで先へ進んで行く。どうして南方がけぬきかとえらそうなことを言わない限り、 紅葉は露伴より凝った振仮名をつけていた。例えば南方と書いてけぬきとある。大抵の人がわからない。それでもけぬ

された「言語と文字の間の溝」である(聞き手は羽仁五郎)。この談話の背景には、一九三八年四月に出版された山本有三『戦 ビというものについて語った談話の中の一節に由来している。その談話とは、一九三八年、『文学』 (岩波書店) 九月号に掲載 ここに露伴のルビ使いと対比的に書かれた紅葉のルビ使いへの言及は、塩谷は出典を特に明言していないが、露伴本人がル

る 他方でさまざまな例を挙げながら大量の留保を示してもおり、 の指摘と併せてすこし見ておきたい。ルビというものの廃止、 争とふたりの婦人』のあとがきにおいて山本がふりがな廃止論を唱えたことがあった。山本のふりがな廃止論は、 いを考察する手がかりとなるように思われるので、時代的隔たりで言えば「太郎坊」初出よりもはるか後のものだが、 にまとめれば平易な文章のために漢字を制限しルビを廃そうというもので、非常に広範な反応を発表直後から引き起こした (ほとんどが賛成意見であった)。そうした同時代的議論について露伴の考えを尋ねた談話である。「太郎坊」におけるルビ使 前述の指摘に関係する一節のみ引く。 現在読むと山本の議論にやや批判的な部分も目立つ談話であ 漢字の制限をめぐって一応の賛意を露伴が示した談話だが 大つかみ

り考へずともいいだろう (「言語と文字の間の溝」露伴全集四十一、岩波書店、一九八○、三八三―三九二) なら傍からどうも仕様がないのです。勿論たいして悪い趣味でも無いからね。何も世の中といふものは然様窮屈にばか 遊戯なのですね。併しをかしいには違ひない、ハハハ。ああいふのは大して良くはない好みだが、それでも當人の好 れば讀めないのです。それで紅葉 (尾崎) などといふ男はさういふことが好きだつたから時々それをやつたのです、閑 としたら、これは個人の意見に訴へるまでだ。扨又萬葉の流儀で、洒落で以て南方と書いてケヌキと讀ませるものもあ す。だから一言にして言へば、ルビーをくつ付けた文章を長く存在させて置くことを望む人がある譯ではないでせう らうが、これなどは洒落ては居るが、南方をケヌキと讀むのには、南方不毛の地に入るといふ字の洒落を知って居なけ いやもう字を書いて、それからそこへ又字をつけるといふ字の自乗みたいなことをして置く必要はちつともないので (中略)例へば、ケヌキの鑷といふ字は元來が難しいからと言つて用ゐないのは可いが、これをも毛抜又は毛抜キと書く

テムを用いて自由な表記をした例と捉えられそうだ(無論、このようなルビ使いは紅葉の「南方」を「けぬき」と読ませるよう ビ使い「適宜(いいほど)の労働(ほねをり)」などは、もし露伴自身の意図によるものなら、露伴がルビという文章上のシス 塩谷の言及がこうした部分に依拠しているのは明白だろう。このような言及を見ていくと、「太郎坊」初出における独特なル なんらかの典拠を持つ「洒落」 たルビ表記とはやや異なるが)。あるいはこうしたルビは露伴の意図ではなく編集の側が

12

ら二十年代の「中流以上向き」の「大新聞」は総ルビにしなかったが、 付したものとも考えられるが、この点は判断できない (とはいえ、いま引用した「言語と文字の間の溝」には、 起こった事態であったのだろう)。 る指摘も露伴はしており (同、三九四)、おそらく同様のことは明治三十年代、「太郎坊」の発表媒体『新小説』 などの雑誌にも それ以降は販売上の理由によって総ルビが増えたとす 明治十年代か

小説 ビが大幅に減るのみならず、初出で「嘸お疲労でしたらう」と表記され、「嘸」に「さぞ」、「疲労」に「くたびれ」とルビが付され ルビが付され、「なまめいた」と読ませようとしているのが見てとれる。一九○一年に出版された『長語』版 小杉天外「揚弓場の一時間」だが、 媒体に由来するルビ使いとも考えられる。たとえば、この号の巻頭に置かれた露伴「太郎坊」のすぐ次に掲載された小説は 言うように「当時はやり」であったという時代的な状況に由来するルビ使いとも、掲載された『新小説 と推測される。 ろう漢字に付されたルビを、初出から選択して付していったのが、本論で依拠する第二次露伴全集版「太郎坊」本文のルビ 二次露伴全集を編集する際、 ルビと判断されたものなどに限るということであり、塩谷の文章は、この点を誤読しないよう一定の注意が必要である。第 けられる。すなわち、①総ルビに近い初出版、②それ以降に刊行されたルビの少ない三つの版、である。まず、 ざまな差異も確認できるのも事実である。特に大きな差異であるルビの振り方から大別すれば、この四種の文章は二つに分 種の文章は、「物語内容」(ジュネット)の観点から言えば大きな差異はないとひとまず結論できるが、一方で表記を巡るさま 岩波文庫『太郎坊 伴「太郎坊」という作品の本文は、初出たる『新小説 前掲芹沢、二十四。注 (11)とも関連するが、「太郎坊」本文の校異の問題に関して、目につい | 露伴の生前ならびにその没後すぐの時点までに (露伴は一九四七年に没する)、四つの異なる版が存在した。これら四 塩谷が述べた、第二次露伴全集版では初出の特徴的なルビ使いが「完全に復活」したという言葉は、あくまで特徴的な 夏季増刊号』版「太郎坊」は、「風」「空」のように難しくはない漢字にまでルビを付しており、ほぼ総ルビに近い。 初出時のルビが露伴自らの指定によって付されたものなのかという点は繰り返すが判断しがたい。 他三篇』版(一九三六、岩波書店)、『日本近代文学選 塩谷を含む編集委員の手によって特徴的と判断されたルビや、読むのにやや困難を感じるであ 同じく総ルビに近く、この小説の一文目にある「婀娜めいた」の「婀娜」には「なま」という 夏季増刊号』版(一八九九、春陽堂)、『長語』版(一九〇一、春陽堂)、 幸田露伴集』版(一九四七、東方書局)というよう た範囲のことを述べておく。露 夏季増刊号』という 一太郎坊」は、 の

取れば、 本文学選 幸田露伴集』の奥付は「昭和二十二年十月世日印刷 版で五音に改められたまま、『近代日本文学選』版、第二次露伴全集版にも引き継がれるが、本論で引用する文章ではこの貞 三篇』九ページに示される会話文の終わり「知れないナ。」に続く「ハ、、、、。」という五音の「ハ」は、 庫版は「はたらき」とひらがなでルビを付すという差異はある)。また些末な点ながら指摘すれば、岩波文庫版『太郎坊 を付す点なども『長語』版と岩波文庫版は共通する(前述のように『長語』では「ハタラキ」とカタカナのルビであり、 した点、 でもなく、先述の「嘸お疲れでしたらう」の表記などが同一なので系統としては『長語』版に近い本文と言える。芹沢が指摘 は、『長語』 よりはルビが増え、行頭の一マス空けなどの体裁が整えられるなどの変化はあるものの、総ルビに近い初出 かと考え、本論で引用した文章ではこの点、第二次露伴全集版を踏襲した)。一九三六年に出た岩波文庫版 認できる (後者の例の第二次露伴全集版のルビは初出とも異なる「そさう」と改められているが、誤記の一種と判断したため を改めて印字され、ルビが省略されている点などに差異が認められる (これに続く「主人」の応答もこれに合わせて表記が改 しては、この選集の編集作業が露伴生前にどの程度進んでいたものと見なすかが微妙な問題として残る。『近代日本文学選 いずれも「。」なしの四音によって構成される「ハヽヽヽ」であり、このような微細な差異も確認できた(この点は、 いたルビが「オシマヒ」に、初出で「過失」に「さゝう」と付されていたルビが「アヤマチ」に変更されている点など、 (「ハタワキ」と誤植されているようにも見える)。『長語』版において同様の例は、初出で「御結局」に「おつもり」と付されて に「いゝほど」、「労働」に「ほねおり」とルビが付された箇所は、『長語』では「労働」のみに「ハタラキ」とルビが付されている められている) 。初出版と『長語』版どちらにもルビが付されている単語はあるものの、初出において「適宜の労働」の「適宜 た「細君」の言葉(この小説の中ではじめて直接話法によって示される会話文)が、ルビなしの「嘸お疲れでしたらう」に表記 ·み第二次露伴全集版の本文から四音にもどし、踊り字を用いない表記として引用した)。一九四七年に出た『近代日本文学 版「太郎坊」も、 |地の文の「労働」には「ほねをり」のルビを付さず、会話文の「適宜の労働」の「労働」のみに「はたらき」というルビ 露伴の没した同年七月三十日よりちょうど三か月後に印刷され、 幸田露伴集』に収録されている齋藤茂吉の解説でも、斎藤茂吉と塩谷賛作成の年譜でも、露伴の死にはまったく ルビの振り方その他の表記から見て『長語』版により近い系統の本文と言える。『近代日本文学選』版に関 昭和二十二年十一月五日発行」となっており、この記述をそのまま受け 露伴の没後出版されたことになる。だが、 初出と『長語』版では 「太郎坊」の本文 幾例も確

通 触 **りの日付に刊行されたのなら露伴が没したことを記す加筆が利かない段階まで編集作業が既に進んでいたものかと推測で** ·れられていない (この二人が露伴の死を知らないことなどありえない)。よって、『近代日本文学選 あるいは実際の奥付よりもはやい時期に組み・印刷・製本が行われ流通したものとも推測できる。『近代日本文学選 幸田露伴集』

幸田露伴集』の編集状況は、

塩谷賛の次のような言及からも窺える。

するかと、文学全集の件には触れないで問合せがあった。短篇を十篇というのは出版社の希望であった (中略) 編者は まだ山形に疎開したままだった茂吉から私に書簡があって、露伴の短篇小説から十篇選ぶとすると君ならどれとどれに とを希望したのは茂吉である (塩谷賛 『幸田露伴 編者の書を得た。これらの書簡は「斎藤茂吉全集」の書簡篇に収めてある。 て、どちらでもいいさと言った。そのように報ずると、どちらでもよろしいのならハクガンとおきめ願いたいと三たび また書を寄せて、「白眼達磨」の白眼はシロメかハクガンか先生に伺ってもらいたいとあった。病床にあった露伴は笑っ 太平洋戦争の直後に東方書局という出版社が文学全集を作ることになって、「幸田露伴集」は斉藤茂吉の編に決まった。 上』中公文庫、一九七七、二五二、傍線引用者 題名はハクガンダルマと読む。そう読むこ

ビが付されるのかという点 (つまりどのように発話を読者へ「指示」するのかという点) をさほど重視していなかったのかも このような自作の漢字表記の発話をめぐる態度が一貫していたのだとすれば、そもそも露伴は、自身の文章にどのようなル 行しつつあり、 この塩谷の言及が重要なのは、 しれない。 トル (この場合は「白眼達磨」) をどのように発話されるべきか問われ、「シロメ」 ダルマだろうと 「ハクガン」 ダルマだろうと "どちらでもいいさ」と笑って答えた、という露伴の鷹揚にも無頓着にも見える態度が窺える点は、さらに重要だろう。仮に 塩谷を介して露伴本人に校訂の疑問点を問うように茂吉が依頼したやりとりが存在した点だが、 ひとつには『近代日本文学選 幸田露伴集』の編集作業は露伴の最晩年の段階からすでに進 自作のタイ

- (13) 前揭露伴全集三卷、二五七、傍線引用者
- (1)前掲露伴全集三巻、二五八—二五九、傍線引用者

- 15 幸田露伴「當流人名辭書」『露伴全集』第四十巻、岩波書店、一九七九、一二九、傍線引用者
- (16) 前揭露伴全集三巻、二五九─二六○、傍線引用者

17

前掲吉成、三二―三三

- 18 露伴は、「文明の庫」(一八九八)においても永楽了全に言及している。 一九七八、二八七 幸田露伴「文明の庫」『露伴全集』第十一巻、 岩波書店
- (1) 前掲露伴全集第四十巻、一三一
- (21)前掲露伴全集三巻、二六三―二六四、傍線引用者(20)前掲露伴全集三巻、二六二―二六三、傍線引用者
- (23)前揭露伴全集三巻、二六六—二六七、傍線引用者(22)前揭露伴全集三巻、二六四—二六六、傍線引用者
- 24 川端康成や小林秀雄といった人たちをとりあげ、彼らの骨董愛好を感性論として考察した近年の重要な成果に、 疵物愛好」(同書、一八五―二二三)の影響下にある。 『物数寄考 骨董と葛藤』(二○一四、平凡社) がある。本論は、特に同書第六章 「残欠のフェティシズム 安東次男と陶片 松原知生
- (25)幸田露伴『太郎坊 他三篇』、岩波文庫、一九三六、一〇五—一〇七
- (26)前掲岩波文庫太郎坊、一〇五
- 27 齋藤茂吉「童馬山房夜話」『齋藤茂吉全集』第十二巻、岩波書店、一九五二、二二四—二二五、 傍線引用者
- 28 齋藤茂吉「解説」 『近代日本文学選 幸田露伴集』東方書局、一九四七、四〇七、傍線引用者
- (29) 前揭齋藤解説、四〇七
- 30 前揭塩谷幸田露伴中、 五 五 二。 五十二、塩谷が述べている発想源についての露伴の言及は、「心融師の歸元鏡」。「露伴全集」第十五巻、
- (31)塩谷賛 『幸田露伴』 上、中公文庫、一九七七、一〇二—一〇三
- 安藤幸「露伴妹の言葉から」高木卓『人間露伴』二一八一二一九、傍線引用者、一部改行を省いた。

- 34 33 前揭塩谷幸田露伴中、一九五 前揭塩谷幸田露伴中、五二、傍線引用者
- 35 幸田露伴「蘆聲」『露伴全集』 第四卷、岩波、一九七八、四四七

(36)「陶古の女人」を取り上げた論文としては、森晴雄「「陶古の女人」論

-熱情の果

——』『室生犀星研究』二一、室生犀星学

会、二〇〇〇・一〇、七七一八六、がある。

- 37 室生犀星「陶古の女人」『陶古の女人』三笠書房、一九五六、一三、傍線引用者
- 前掲犀星陶古の女人、一四―一五、傍線引用者

38

- 前掲犀星陶古の女人、一六―一七、傍線引用者
- 前掲犀星陶古の女人、二一、傍線引用者

40 39

(大学院博士後期課程学生)

### SUMMARY

## The 'Memory' and the 'Pottery' in the Writing of Kōda Rohan : With References to *Sakazuki* in 'Tarōbō'

### Daisuke Yoshida

Key words: Kōda Rohan / 'Tarōbō' / Pottery / Murou Saisei / 'Tōko-no-nyonin'

Kōda Rohan's short story titled 'Tarōbō' was published in the supplementary volume of *Shin-Shōsetsu* (Also known as *Dai-niji Shin-Shōsetsu*) during July 1899. This work has not attracted much attention of the researchers and the discussion on the contents remains insufficient.

Accordingly, this paper attempts to analyze the text of 'Tarōbō'. Further, in the process of analysis, it is aimed to identify the characteristic of 'Tarōbō' by discussing the memory of love existed in the pottery which fall and got broken.

Finally, an attempt is made to compare this writing with Murou Saisei's 'Tōko-no-nyoninn' (1959). Direct influence is unknown between the two writings but a clear contrast can be found. By making use of this line the place of 'Tarōbō' in modern Japanese literature is discussed.